慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉井勇の芝居歌：歌舞伎座の筋書・ 昭和二十六年～三十年
Sub Title	
Author	田坂, 憲二(Tasaka, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.109- 133
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0109
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉井勇の芝居歌

――歌舞伎座の筋書・昭和二十六年～三十年――

田坂憲二

はじめに

吉井勇研究は、まだまだ残された課題が多いが、資料的な面で急務であるのが、『吉井勇全集』に収められなかった、短歌、小説、戯曲、随筆類の発掘と位置づけであろう。特に、吉井勇の仕事の中核をなす短歌は、全集に収められていないものが膨大に残っている。

その中でも、演劇を取り扱った歌は、吉井勇自身が早くから戯曲の筆を執り、演劇批評をこなし、脚色担当も行っていたから、他の歌人の追随を許さない優れたものがある。[1] 戦前の芝居歌はそれでも一部が歌集として刊行されたが、戦後のものはほとんど手つかずの状態と言って良い。この時期、歌舞伎座、明治座、新橋演舞場、南座、大阪歌舞伎座などの筋書に掲載された歌は、少年時代から半世紀以上舞台を見続けてきた吉井勇が、様々な演目を鮮やかに捌いてみせるものである。

特に、歌舞伎座においては、昭和二十六年の再開場以来、吉井勇が長逝する三十五年まで一年も欠かさず、長期間にわたりその歌が筋書を飾っている。二十八年以降はほぼ毎月筋書の歌が掲載され、質量ともに、芝居歌を考える上で最良の資料である。そこで、歌舞伎座筋書の歌の集成をして、研究の礎としたい。

方針は以下の通りである。見出しとして、上演年月と、当月のタイトル（歌題）とを記す。つづいて短歌を掲出し、一首毎に対象の演目名と、何番目に上演されたものかを〈昼①島衛月白浪〉の形で注を付ける。歌自体には、どの演目を詠んだかという詞書はなく、[2] 演目が分かりにくいものもあるからである。外題は筋書掲載のものに拠ったが、上演場面を限定するために、適宜、釣瓶鮨屋、寺子屋などの略称・通称を用いた。数字で示したように、歌のほとんどが演目の順に並んでいるのは、筋書を読む観客に配慮したためであろう。特定の演目ではなく、その月全体の雰囲気を示すものは〈総説〉と記した。こうして歌を掲出した後に、当月の筋書の歌全体について、月ごとに簡単な考察を加える。紙幅の関係で簡略なものになったが、吉井勇の筋書の歌は、それぞれの演目や演者の特性を見事に剔抉し、季節感なども巧みに盛り込んだもので、時に分かりやすく、時に高踏的に、時に現代的表現を用い、時に万葉語や王朝

語や漢語を交え、手練れの専門歌人としての吉井勇の力量を遺憾なく示すものである。[3]

猶、吉井勇が執筆した十年間の歌舞伎座筋書の歌を、便宜上五期に分け、今回は第三期まで考察する。筋書の歌は翌月の演目と俳優が定まってから制作するため、著者校正の時間はない。そのためルビや本文の仮名遣いに誤植が散見する。吉井勇は新聞などやむを得ない場合以外は旧仮名遣いであるから、仮名遣いの誤植は訂しておいた。本文部分については、（二首目「言わむ」→「言はむ」）のように、原型がたどれるようにしている。また漢字は新漢字に改めたが、人名に関しては現在も旧字体表記を使用する役者はそれを尊重した。

一　第一期　昭和二十六・二十七年

戦後、歌舞伎座が再興されて最初の二年間である。筋書に吉井勇の歌が最初に掲載されるのが二十六年三月の「戯曲源氏物語」七首である。歌人で最も歌舞伎に詳しく、源氏物語の抄訳などもある吉井勇に白羽の矢が立ったのであろう。十月再演の時に「源氏物語讃」五首、翌年五月・六月の続編上演の時に「源氏物語歌抄」八首も詠んでいる。

この時期、これ以外に三回、吉井勇の歌が筋書を飾る。二十六年九月「仁左衛門襲名を祝して」五首、二十七年一月「歌舞伎新春」五首、同十一月「顔見世歌舞伎」七首である。掲載月も飛び飛びであり、襲名祝、新春の歌、演目の歌と内容もそれぞれ異なっているから、その都度歌舞伎座からの依頼に応じて作ったのであろう。

二十六年三月「戯曲源氏物語」

まばゆくも舞台のうへに開かれし源氏絵巻は見とも飽かめや
〈昼①源氏物語総説〉

源氏物語戯曲化さるといふことも梨園めでたきことのひとつか
〈昼①源氏物語総説〉

観るものをただ恍然となさしむる光源氏に扮するや誰
〈昼①源氏物語総説〉

桐壺の巻くりかへし読みしのち心しづかに舞台おもはむ
〈昼①源氏物語桐壺巻〉

舞台見ていみじと思ふいにしへの紫女の才筆いまもけざやか
〈昼①源氏物語総説〉

夕顔といへる女のあはれさを舞台にも見るこの世にも見る
〈昼①源氏物語夕顔巻〉

美しきものをよろこぶ心もて源氏物語の芝居たたへむ
〈昼①源氏物語総説〉

昼の部の勧進帳や、夜の部の暫、矢口の渡、夕顔棚、助六などは一切詠まれていない。当月の演目の歌全体ではなく、源氏物語の歌を求められたのである。一首目、二首目は、歌舞伎として源氏物語が上演される時代になったことを寿ぐ。三首目は、観客の一番の興味を巧みに代弁したもの。四首目、五首目は、源氏物語の原典をひもときながら舞台を想像し、舞台を見ながら紫式部の才能に思いを馳せる。原典と舞台とを往還する思いを二つの歌にまとめた。最後は、幕が下りた後の鳴り止まない拍手の音が聞こえてくるような、歌群全体のまとめに相応しい歌である。

二十六年九月「仁左衛門襲名を祝して」

上方の歌舞伎のよさを見するべく新仁左衛門おほらかにあれ
〈総説〉

口上の幕明きまへのときめきはいささか恋に似ると言はむか
〈昼②口上〉

馬切の花道に立つ姿をば豊国の絵に似るとたたへむ
〈昼③三千両黄金蔵入〉

伊左衛門の紙衣姿はしみじみと傾城買のあはれさを見す
〈総説〉

亡き父も喜びまさむわれもまたその父思ひ今日をよろこぶ
〈総説〉

当月の演目案内ではなく、純粋に襲名祝賀の歌である。口上以外では、家の芸片岡十二集の「三千両黄金蔵入（馬切）」の松平長七郎を取り上げる。筋書の「段々の見せ処」で川尻清譚も真っ先に取り上げた「品位と貫目で見せる役」であり、三代目中村時蔵、十七代目中村勘三郎、十六代目市村羽左衛門、八代目松本幸四郎等、豪華絢爛な同心たちに囲まれ、錦絵のような堂々たる姿であっただろう。一首目は、新仁左衛門に対する激励の思い。四首目は南座二十一年十月の舞台などの記憶か。五首目は、養父十一代目仁左衛門のこと。養父の設立した片岡少年劇で腕を磨き、早くに『亡き父の霊に』の著があり、前年、吉井勇も懇意の和敬書店から『十一世片岡仁左衛門』を刊行した新仁左衛門にとって、何よりも嬉しい歌であっただろう。（二首目「言わむ」→「言はむ」）

二十六年十月「源氏物語讃」

はしけやし光の君が元服の日の髪の香に舞台にほふや
〈昼①源氏物語桐壺巻〉

紫女の書く物語より抜け出でて舞台にも咲く夕顔の花
〈昼①源氏物語夕顔巻〉

青海波舞ふ姿見ていにしへのうつくしき世を胸に描かむ
〈昼①源氏物語紅葉賀巻〉

見る人も懺悔ごころとなりぬべしたふとき女御の落飾あはれ
〈昼①源氏物語賢木巻〉

須磨明石さすらふひとのうき罪を海龍王も許させたまへ
〈昼①源氏物語須磨明石巻〉

当月の源氏物語は、本年三月の上演を多少改訂して再演したものである。改訂の骨格は、藤壺落飾の賢木巻で終わっていたものを、光源氏が須磨に流離する場面まで延ばしたことである。吉井勇の歌は、公開以前に作成された前回の歌と異なり、すべて源氏物語の個々の場面と対応している。桐壺巻の光源氏元服、夕顔の花咲く場面、紅葉賀巻の青海波、賢木巻の藤壺出家、そして須磨明石巻と、全体の流れを追うように詠まれている。各巻、各幕の名場面の案内である。したがってこの五首は、今回の源氏物語の最も簡潔なダイジェストとなっており、観客の鑑賞の一助となる。後の、吉井勇の筋書の歌の基本的スタイルと通じるものがある。

二十七年一月「歌舞伎新春」

またしても歌舞伎礼讃するひとに年賀の詞廊下にて述ぶ
〈総説〉

楽屋入りする歌右衛門楚々として階をのぼれば春来るらむか
〈総説〉
歌舞伎座のまへ絡繹と人ゆきて春の芝居の看板あがる
〈総説〉
新どしの歌舞伎月旦するひとよ批を打つもなほ楽しげにあれ
〈総説〉
たまさかは京ゆはるばる罷り出て春の歌舞伎を見むとこそ思へ
〈総説〉

後年の吉井勇の筋書の歌とはことなり、新春を寿ぐために求められたと考えて良いであろう。正月の歌舞伎座の雰囲気を伝えるものであって、個別の演目を詠んだものは一首もない。狂言の内容案内としての、筋書の歌ではないのである。これは、「寿新春」として中村吉右衛門が「松すぎて年始まはりの役者かな」「新しき着到板の初芝居」、坂東三津五郎が「年始にも来ぬ人なれど初芝居」の句を寄せている（三〇頁）のと同じく、観客に対する正月の挨拶と考えるべきであろう。今回は「歌舞伎新春　吉井勇」の部分が、原稿用紙に書かれた文字をそのままの書体で印刷している。吉井勇の筆跡もまた人気のあったものであるから、やがて、歌題と署名は、筆跡そのままで載せる形が定着する。

二十七年五月「源氏物語歌抄」

絵合せの幕開く時しほのめくは恋のにほひか沈のにほひか
（絵合せ）〈昼①源氏物語絵合巻〉
美しき舞台を見つつわれもまたともに歎かむ藤壺の死を
（藤壺御落命）〈昼①源氏物語薄雲巻〉
夕霧の吹く笛の音もあはれなり切なき恋の思ひこもれば
（雪晴れ）〈昼①源氏物語乙女巻〉
夕顔のむすめうつくし幕ぎれの大殿油の灯さへほのかに
（玉鬘）〈昼①源氏物語玉鬘巻〉
舞台には龍頭鷁首の船うかび源氏の栄華ここに極まる
（龍頭鷁首）〈昼①源氏物語胡蝶巻〉
かそけくも源氏絵巻のなかに飛ぶ夜の蛍はあはれなるかも
（蛍）〈昼①源氏物語蛍巻〉
うばたまの髭黒の髭くろぐろとかくしてもなほ恋に悩むや
（真木柱）〈昼①源氏物語真木柱巻〉
そのなかにひときは高き声艶に催馬楽うたひゆくは誰が子ぞ
（篝火）〈昼①源氏物語篝火巻〉

前年三月・十月の源氏物語の続きを、第二部として公開したもの。筋書には、第二部、絵合巻（清涼殿の一部）～薄雲巻（藤壺御落命・宮中の一室）～乙女巻（内大臣祖母大宮の邸）～玉鬘巻（椿市の宿～玉鬘御対面六条院源氏大臣の御殿）～胡蝶巻（春の御殿の御池・龍頭鷁首）～蛍巻（六條院玉鬘の部屋～大原野行幸桂川の浮橋の橋詰）～真木柱巻（髭黒大將邸）～篝火巻（六條の庭に面した春の御殿）とある。吉井勇は、この八巻を順番通りに詠む。第七幕真木柱巻の後に第八幕篝火巻があり、原典の巻順とは異なるが、第八幕は原典の初音巻を加えた形で、六条院の女性達が顔を揃える正月の場面に髭黒と結婚をした玉鬘を加えて、豪華な幕切れとした。（三首目「あわれ」→「あはれ」、八首目「ひときわ」→「ひときは」）

二十七年六月「源氏物語歌抄」

前月昼の部の源氏物語を、当月は夜の部に移した。それ以外の一部の狂言を入れ替えて続演という立場で、六月一日が「返り初日」である。筋書も、五月版の一頁～一六頁の源氏物語に関する部分を、六月版では一七頁～三二頁に移動させる、頁が変わっただけで吉井勇の歌も同じものである。

二十七年十一月「顔見世歌舞伎」

おさんあはれ茂兵衛あはれと思ひつつ人情機微の芝居見て泣く
〈昼①大経師昔暦〉

亡き柿紅さながらそこに在るごとし芋堀長者見つつし居れば
〈昼②芋堀長者〉

引窓の終りしのちの幕間のそぞろ心は何のゆゑぞも
〈昼③双蝶々曲輪日記〉

梅王の飛六法にさそはれてわがたましひも花道を飛ぶ
〈夜①菅原傳授手習鑑〉

椀久がたどる恋路の濡衣われもむかしはかくやありけむ
〈夜②二人椀久〉

いきどほり極まるところ俊寛の身はそのままに石となるべき
〈夜③平家女護島〉

明烏聴きつつ思ひ入りぬべし江戸の遊里の艶なることに
〈夜⑤明烏夢泡雪〉

今回で、歌舞伎座の筋書の歌の基本骨格が定まる。七首の歌は、昼④の舞踊（心猿の秋月、近江のお兼）と、夜④の勧進帳以外を、上演順に一演目一首詠んだもの。外題（芋堀長者）、通称（おさん茂兵衛、引窓、俊寛、明烏）、主要人物（梅王、椀久）、作者（柿紅）など、多様なキー・ワードを鏤めながら、名場面や見所を詠む。一首目は初句の字余りの効果を生かした対句で一挙に作品世界に引き込む。三首目は幕が下りた後の余韻。四首目は吉井勇が好んだ表現[4]。六首目は、高台の岩に上った俊寛がそのまま石と化してしまうほどの懊悩を詠んだもの。一つの頁全面をゆったりと使い、吉井勇の歌を大きな活字で組んでいる。

第一期では、昭和二十六年一月二月（同演目）、四月五月（同演目）、六月（新派）、七月、八月、十一月、十二月、二十七年二月、三月、四月、七月、八月（新派）、九月、十月、十二月には吉井勇の歌はなく、筋書の歌はまだ恒例とはなっていない。むしろ二十七年四月の筋書一頁に掲載された高浜虚子の「歌舞伎座五句」が、二期以降の吉井勇の筋書の歌の先駆として注目されるものである。

二　第二期　昭和二十八年

前年十一月の「顔見世歌舞伎」七首が好評だったのだろう、二十八年は筋書に毎月歌を求められるようになる。特に二月からは「如月歌舞伎」「弥生歌舞伎」「卯月歌舞伎」と歌題も一貫するから、一年間連続との約束であったか。演目の内容や演者の紹介と見所を提示するやり方は、この時期から最後まで一貫するものである。歌題や署名を影印で示し吉井勇の筆跡も味わう形や、カットや写真を入れる形などが徐々に確立される。七月の新派公演も詠んでいるが、八月は工事のため歌舞伎座自体が休場である。

二十八年一月「歌舞伎春色」

時蔵の重の井を見にゆかずやと祇園の蘇小われを誘へり
〈昼①恋女房染分手綱〉

ほのぼのと舞台に春の風吹きて栄蔵の撥蝶のごとしも
〈昼②三人片輪〉

黙阿弥の世話狂言のおもしろさ酒ならねども幕ごとに酔ふ
〈昼③吉様参由縁音信〉

わが友の歌右衛門好き語らくは阿古屋するものほかにあらむや
〈昼④壇浦兜軍記〉

殺さるるお菊あはれと思ふらし君が手にする白きはんけち
〈夜①番町皿屋敷暫〉

毛谷村の六助をする役者ゐる楽屋を訪ひて年を祝がまし
〈夜②彦山権現誓助剣〉

春ながら手の籠釣瓶いろ冴えて舞台寒きは至芸なるらし
〈夜③籠釣瓶花街酔醒〉

前年十一月の筋書の歌は、外題、通称、登場人物、作者を詠み込んでいたが、これに役者や長唄や清元の演者名を加えて、筋書の歌の基本形ができあがる。「毛谷村の六助をする役者」は二代目市川猿之助、妖刀籠釣瓶をひっさげ舞台に凄みを与える佐野次郎左衛門を演じたのは初代中村吉右衛門。これに季節が盛り込まれ、その月、その時の一回性を具現する。当月は、正月であり、新春であり、寒も厳しいわけだから「楽屋を訪ひて年を祝がまし」「舞台に春の風吹きて」「舞台寒きは至芸なるらし」と、季節感が横溢する歌となる。猶、前年同様、吉右衛門「初春や歌舞伎座前の人通り」、猿之助「白粉の襟に冷たし初芝居」等の俳句も正月公演の筋書に花を添えている。

二十八年二月「如月歌舞伎」

春すでに近しと思ふ如月の風歌舞伎座の看板吹けば
〈総説〉

河内山の高頬の黒子くろぐろと播磨屋の芸神に入るらし
〈昼③天衣紛上野初花〉

三津五郎の喜撰の振にさそはれてわれの心もともに躍るや
〈昼⑤六歌仙容彩〉

時蔵のお梶を見ればはしけやし祇園蘇小の誰が子にか似る
〈昼⑤六歌仙容彩〉

舞台見て思ひ出づることもなからめや観潮楼の先生の作
〈夜②ぢいさんばあさん〉

松王の病ひ鉢巻むらさきに歌舞伎美いまか極まるらしも
〈③菅原伝授手習鑑〉

かにかくにうかれ坊主はおもしろし破戒無慙の墨染の袖
〈夜④の②うかれ坊主〉

前月から延長の演目が多いので周到にそれらを避け、新演目のみで詠む。毎月筋書を求める観客に対する配慮である。一首目は特定の演目ではなく、当月の劇場の雰囲気を詠む。筋書の歌の冒頭や末尾に時々この傾向の歌を置き、劇場の空気や季節感を示す。二首目は吉右衛門の名演。踊りの神様と呼ばれた七代目坂東三津五郎の場合は、どうしてもこのような詠み方になるが、喜撰は『坂東三津五郎舞台写真集』（舞台すがた社、昭和二十七年）の原色版写真ともなっている。観潮楼の先生（鷗外）という呼び方は、番町の先生（鏡花・三十年八月）と同じ

く吉井の敬愛の念の現れ。（五首目「思ひ出ずる」→「思ひ出づる」）

二十八年三月「弥生歌舞伎」

金閣寺舞台に見れば京住みのわれ恍惚となりぬるもうべ
〈昼①祇園祭礼信仰記〉

梅幸の藤娘見るよろこびを書きておこしぬ祇園蘇小は
〈昼②藤娘〉

わが友の書きたる江戸の夕映を弥生歌舞伎の一位ともがな
〈昼③江戸の夕映〉

棒しばり見つつし居ればわがこころ二人の冠者とともに踊るや
〈昼④棒しばり〉

五斗兵衛の酔ひぶりをかしわが知れる梨園の友のさまに似たれば
〈夜①義経腰越状〉

ほのぼのと蝴蝶の舞台見へあらむ山田美妙の名さへはるけく
〈夜②蝴蝶〉

海老蔵の助六を見て思へらくわが江戸歌舞伎ながく滅びず
〈夜③助六由縁江戸桜〉

当月から、吉井勇の歌は筋書の一頁に置かれることが多くなる。[5] それだけ筋書の歌の存在が大きくなってきたと言えようか。演目の内容や名場面を純客観的に詠むだけではなく、視点としての詠者を鮮明に打ち出すのが吉井の筋書の歌の特色で、当月は「京住みのわれ」「祇園蘇小」と京都色を強く打ち出す。三首目は親友大佛次郎へのエール。四首目は思わず身体が動いてしまうような観客の思いを代弁、前月の喜撰の歌と同様。五首目は五斗兵衛に似るのは誰だろうと想像する楽しみを与える。六首目は、遠ざかりゆく明治への挽歌と言えようか。七首目の「江戸歌舞伎ながく滅びず」は、会場を後にする多くの観客の共通する思いを分かりやすく述べた。

二十八年四月「卯月歌舞伎」

とうたらりとうとうたらり三津五郎の舌出し三番忘れえめやも
〈昼①再春菘種蒔〉

時蔵のおわさあはれと涙ぐむ女ごころにわれも泣かるる
〈昼②御所桜弁慶上使〉

芸の寂びこのごろしるし播磨屋の梶原の顔は写楽似にして
〈昼④梶原平三誉石切〉

猿之助は忠信役者ほのかなる鼓の音にも酔へるがに寄る
〈昼⑤義経千本桜〉

大江戸の市川流の荒事の暫を見て愁ひわすれむ
〈夜①暫〉

はしけやしわが歌右衛門扮すれば三千歳姫もあはれなるかな
〈夜②増補忠臣蔵〉

道行の小浪の姿目にうかべほのぼのとしてこよい寝むとす
〈夜③仮名手本忠臣蔵〉

高坏の足駄をどりはおもしろし勘三郎の手振りいみじく
〈夜⑤高坏〉

昼五種、夜五種の演目を八首で詠んでいるから、昼③「襲名披露　だんまり」夜④「同志の人々」が省かれている。当月は、播磨屋中村吉右衛門を筆頭に、三津五郎、時蔵、猿之助、勘三郎、六代目中村歌右衛門と大幹部の名前が列挙されるが、「道行の小浪」を演じたのは美貌を歌われた中村芝雀（のちの

四代目中村時蔵）である。梅枝から芝雀襲名披露の月でもあるから、何よりの祝詞であっただろう。猶、吉右衛門劇団は翌月大阪歌舞伎座でやはり芝雀・歌昇披露を兼ねた興行を行っているが、その筋書でも「はしけやし戸無瀬小浪の道行をただ恍として見てあり吾は」と詠んでいる。吉右衛門の石切梶原、三津五郎の三番叟、時蔵のおわさなど、当月は演者を代表する作品が揃った。

二十八年五月「皐月歌舞伎」

五重塔の芝居を見ればいまは亡き露伴先生思はるるかな
〈昼①五重塔〉

弁慶が「阿吽の二字」と叫ぶとき胸を打つものあるにあらずや
〈昼②勧進帳〉

そのむかし聞きし清元おもひ出ててひとりつぶやく権八あはれと
〈昼③比翼蝶夢廓〉

朝比奈の猿隈の紅あかあかと歌舞伎美ここに極まるらしも
〈夜①寿曾我対面〉

順の詩は美しからむ蒼風が舞台に見する木蘭もまた
〈夜②木蘭物語〉

はつ夏のそぞろ心にわれ待ちぬ髪結新三の花道の出を
〈夜③梅雨小袖昔八丈〉

歌舞伎座の幕間うれしいまもなほ昔ながらの皐月風吹き
〈総説〉

役者名を並べる前月の型から一転、敢えて変化を持たせたか。一首目は作者の「露伴先生」の名を出す。この演目は、翌月南座でも再演されるが、そこでは二代目尾上九朗右衛門の名前を挙げて棲み分けを図っている。二首目は富樫・弁慶の問答中の「いで入る息は」「阿吽の二字」によるもの。三首目は「比翼蝶夢廓」の中の清元「其小唄夢廓」、当月は清元延寿太夫が出演した。四首目は主役の工藤祐経や曽我兄弟からずらし、猿隈の小林朝比奈を詠む[6]。五首目は未見の新作だから、原作者川田順と、舞台装置担当の勅使河原蒼風の名前を入れる。六首目、七首目は爽やかな「皐月風」が観客に届くような歌である。筋書の歌の頁上部に自宅で寛ぐ和服姿の吉井勇の写真を掲出。吉井勇や永井荷風の知遇を得ていた松竹の小高志郎がカメラマンとともに上洛、撮影したもの。

二十八年六月「水無月歌舞伎」

時蔵の政岡を見て泣くひとの肩の顫へもただならなくに
〈昼①伽羅先代萩〉

在りし日の青果思へば江戸城の舞台見てさへ涙うるみ来
〈昼③慶喜命乞〉

勘三郎の芸のいみじさあぢはひて按摩道玄憎みたまふな
〈昼④盲長屋梅加賀鳶〉

枕獅子見てあるほどにいつとなく吾を忘れてあるもすべなさ
〈昼⑤枕獅子〉

中車とふ名を番附に見ることを歌舞伎座に来てすがしみにけり
〈総説〉

播磨屋の大蔵卿の声いとど胸を打つものあるにあらずや
〈夜③一條大蔵譚〉

髭櫓見つつわが魂わがこころたんなたりやと踊らむとするも
〈夜②髭櫓〉

たまきはる命をかけし新助と同じ思ひのなきにしもあらず

〈夜④名月八幡祭〉

当月は、市川八百蔵が、八代目市川中車を襲名する披露を兼ねた演目である。先代中車も贔屓の一人であったし[7]、八百蔵は、大正二年本郷座で吉井の戯曲『燈籠物語』を二代目市川左團次とともに演じた縁などもあったから、感無量というところであろう。歌群の中心に、中車の名前を見る喜びの歌を置いたのもそうした背景があろうか。昼の部の歌は、役者、作者、役者、作品名と一首毎に変化を持たせている。夜の部の順番を入れ替えたのは、滑稽味のある作品を大蔵卿・縮屋新助の間にクッションのように挟むためであったか。今月から、舞台を描いたカットか写真が、頁の上部を飾るようになる。当月は千松と鶴千代のカット。

二十八年七月「青眉抄所感」

しみじみと母の青眉恋ふひとをわが世たふとき画聖とせむ

〈夜①青眉抄〉

かくてしもふたたび舞台のうへに見る松園番はすがしからずや

〈夜①青眉抄〉

しめやかに祇園囃子を聞きてゐぬ松園の絵を思ひうかべて

〈夜①青眉抄〉

喜多村が四条の橋をうたふとき舞台たちまち京の夜となる

〈夜①青眉抄〉

さながらに松園そこにあるここち八重子の芸のいみじきかなや

〈夜①青眉抄〉

鳥辺山の舞台を見つついまは亡き青巾仙女なつかしみ居り

〈夜①青眉抄〉

老癡なほ舞台を知らずかなしけど戯曲の筆は折りぬべきかな

〈夜①青眉抄〉

七月は歌舞伎ではなく、新派の公演。この月、上村松園を描いた吉井勇の新作「青眉抄」が上演される。二二頁に掲載されているのは、次頁から「青眉抄」の梗概が記されているからで、歌舞伎の時のように、当月の演目全体の解説ではなくて、あくまでも自作「青眉抄」についての歌を求められたのである。最後の歌は、逆説的自負であろうか。大谷竹次郎は「大変味はひのある面白いもの」との書簡を吉井勇に送っている[8]。上村松園を演じたのは水谷八重子、その師匠竹内栖鳳を演じたのが喜多村緑郎である。上欄に、水谷八重子と喜多村緑郎が向かい合う舞台写真を配している。当月は他に、「幻燈」「幸福さん」「虞美人草」「今年竹」「お婆ちゃんの青春」の五作品が上演された。

二十八年九月「長月歌舞伎」

いそのかみ在りし歌舞伎をたたへつつ梅王丸の紅隈は見む

〈昼①の②菅原傳授手習鑑・車引〉

わが友の夜叉王見れば若き日のおもひで許多湧き来るものを

〈昼③修禅寺物語〉

播磨屋の長兵衛を見て思へらく台詞さながら発句のごとしと

〈昼④極附幡隨長兵衛〉

峠路にわかれを惜しむひとをどり萬歳あはれ才蔵あはれ

〈昼⑤峠の万歳〉

歌右衛門の葛城太夫見にゆくといそいそ去んぬ祇園阿嬌は

〈夜⑤其面影稲妻草〉

さはやかに秋はくるらしよくをどる勘三郎の鳶頭より

〈夜③お祭り〉

はれやかに口上の幕開くときの梨園の豪華おもほゆるかも

〈昼②口上〉

一首目は博多人形（梅王丸）の絵葉書にも使われたもの。[9] 二首目の「わが友」は市川猿之助。播磨屋、歌右衛門、勘三郎と、座頭・幹部を並べる穏当な表現。四首目のように、四句五句を対句にするのも、吉井勇の好む修辞。後半三首の順番が多少気になる。演目を入れ替えるのならば、六首目を末尾にして、明るく爽やかに劇場を後にする形にしたかった。口上は幕開きだから最初に持って来るのがふさわしい。歌順の問題も誤植（六首目「さわやか」→「さはやか」）と連動するか。当月の極附幡隨長兵衛など、このころ筋書の歌のカットを描いている木下秀一郎は、医師で画家という異色の人物。『歌舞伎素描』（講談社、昭和四十三年）に、その巧みな舞台スケッチを見ることが出来る。吉井勇は昭和十年に木下医院に入院、治療を受けたという因縁もある。[10]

二十八年十月「神無月歌舞伎」

大徳寺焼香の場の思ひ出を懐しむこそわりなかりけれ

〈昼①大徳寺〉

梅幸の鏡獅子見るよろこびを祇園蘇小に書きてやらまし

〈昼③鏡獅子〉

黙阿弥の芝居のなかにゐる人よこよひもわれとともに酔はずや

〈昼④新皿屋舗月雨暈〉

左團次の築山御前あはれやと思ひつつ見る友の戯曲を

〈夜①築山殿始末〉

成田屋を追慕の言葉身に染みておろそかならず口上の幕

〈夜②團十郎追善口上〉

白珠のごとくつめたきかの人も素襖落を見れば笑ふや

〈夜③素襖落小鍛冶〉

花道にわが伊左衛門あらはれてとみになまめく編笠のいろ

〈夜④廓文章〉

昼②解脱以外の、全演目を順番に詠む。今回の解脱は、先代左團次と組んで吉井勇が古劇に新解釈を施した大正年間の作品ではない。それ以外では、七代目尾上梅幸、三代目市川左團次の名前を出し、九代目市川海老蔵（大徳寺の秀吉）や二代目尾上松緑（素襖落の太郎冠者）などの姿が自然に想起される安定した詠みぶり。三首目は、敢えて宗五郎の名前を出さずに芝居の雰囲気を伝える。最後の一首は、伊左衛門が花道に現れたときの劇場の雰囲気を見事に再現する。季節感を盛り込んだ歌がないのは、團十郎五十年祭という特別な興行であることに拠るか。「神無月歌舞伎　吉井勇」はいつも通り吉井勇の美しい筆跡だが、今回はペン書。筆を使わないのは前月九月下旬は上京中で、旅先で原稿が書かれたか。

二十八年十一月「霜月歌舞伎」

豊隆の吉右衛門論思ひ出でて盛綱見ればいみじくもあるか

〈昼③近江源氏先陣館〉

世にかかる美しきものまたありや道成寺見て恍惚とする

〈昼④京鹿子娘道成寺〉

白拍子花子となれば歌右衛門手ぶりもいとど婀娜たるかなや
〈昼④京鹿子娘道成寺〉

酔奴見て陶然となることも歌舞伎芝居のよさと思はむ
〈昼②醉奴〉

芸の寂び心の寂びを思はしむ鬼一法眼しら髪にして
〈夜②鬼一法眼三略巻〉

もろこしの龍泉太阿にまさりたる鍛冶の打ちぶり友はつたふる
〈夜③小鍛冶〉

蘭蝶を聞きて泣きたる夜もありきこのひと幕に関るおもひで
〈夜④ゆかりの紫頭巾〉

昼①「鬼火」は新作なので省略。②の舞踊劇「酔奴」が繰り上がり最初になるのを避け、座頭吉右衛門の代表作の盛綱陣屋の歌をその前に置き、全体の序の役割を与えた。今回の盛綱陣屋は、文化財保護の立場から小宮豊隆監修で記録映画が作成されるから、「芸術祭大歌舞伎」の筋書の歌の劈頭に最も相応しいものである。「豊隆の吉右衛門論」とは、『新小説』[11]明治四十四年八月号に掲載された「中村吉右衛門論」であろう。三十年九月の吉右衛門一周忌追善興行の筋書では、直接同論からの引用もある。六首目は長唄の歌詞を巧みに使う。最後の歌は、当月出演の猿之助や故小山内薫とともに聴いた吉丸の「蘭蝶」の記憶であろうか。[12]あるいは「蘭蝶風邪」という小説の素材となった思い出であろうか。[13]

二十八年十二月「師走歌舞伎」

師走来ぬ仁木の睨む眦りにちらりと見たるその寒さより
〈昼①伽羅先代萩〉

飯焚きの政岡を見て涙しぬ歌右衛門似の艶なるひとは
〈昼①伽羅先代萩〉

友の書きし身替座禅見るときは友在りし日の恋しきろかも
〈昼②身替座禅〉

われもまた地獄変相図のなかにあるべき身なり舞台よく見む
〈夜①地獄變〉

墨染の桜の精に似しひとを祇園阿嬌のなかにもとむる
〈夜②積恋雪関扉〉

いまの世の関兵衛役者誰々ぞ夢見ごこちにひとり思へる
〈夜②積恋雪関扉〉

ここにあれば市井の師走すでに去り歌舞伎早くも春に入るかな
〈夜③刺青奇偶〉

昼夜合計六つの演目から、最後の「滑稽俄安宅新関」を省略。その代りに、夜③「刺青奇偶」を最後に据えたことにより、見事に結構が照応した。十二月の興行だから、一首目初句「師走来ぬ」と詠み起こし、仁木弾正の凄みのある睨みのぞっとするような寒さに季節感を重ねる。師走歌舞伎が終われば、数日後には正月、一陽来復、新春到来である。「刺青奇偶」は、「春のおぼろ夜の、下総行徳の船着き場」（筋書）から始まるから、春を待ち焦がれる気持ちを「市井の師走すでに去り歌舞伎早くも春に入るかな」とまとめて、一首目の寒さと対応させた。吉井勇は早く昭和十年に地獄変の脚色演出を行っている。四首目は当時の、そして後年まで伏流する心境が覗われる重要な歌である。

三　第三期　昭和二十九年・三十年

昭和二十九年一月、二月には吉井勇の歌はない。二十八年一年間の約束で連載が終了したが、読者の強い要望があって、二十九年三月から再開されたという事情があるのではなかろうか。以後、特段の事情がない限り、吉井勇の歌は、東京歌舞伎座の筋書を毎月飾ることになる。特に、二十九年四月以降は、筋書の最初の頁に固定されるようになり（ごく一部例外がある）、文字通り筋書の顔になってゆく。三十年十月のみ吉井勇の歌を欠くが、体調不良などによるものか。

二十九年三月「歌舞伎春色」

歌舞伎座の雛の夜祭ともに見る人もなければ寂しと言ふか
〈昼①桃節句雛之夜祭〉

京にゐて歌舞伎の舞台思ふとき笛吹童子の笛ぞ聞こゆる
〈昼②笛吹童子〉

松緑の五斗兵衛見てはいまは亡き友の酔ひぶり思ひ出でつも
〈昼③義経腰越状〉

うらわかき延寿太夫の清元は恍惚として聞くべかりけり
〈昼④花街模様薊色縫〉

十六夜の花道の出のたまゆらにまこと歌舞伎の絵画美を見む
〈昼④花街模様薊色縫〉

いつの世も情痴の世界おもしろと絵島生島見つつ思へらく
〈夜①絵島生島〉

唐相撲見て世のうさを忘れよと君は書きたり歌舞伎だよりに
〈夜②唐相撲〉

海老蔵の御所の五郎蔵見るときは胸ときめくと言ふは誰が子ぞ
〈夜③侠客御所五郎蔵〉

吉井勇の歌が三か月ぶりに筋書に帰ってきた。二十八年後半のように巻頭ではなく、一七頁となっているのは、緊急の復活であり、頁編成にも影響を与えたか。通常は表扉裏にある演目・俳優一覧が一頁に来ている。歌自体は、七種の演目を八首に無難にまとめたもの。「笛吹童子」は前年人気を博したNHKラジオドラマ、四月には東映映画が公開されるが、前月に歌舞伎座でもこの作品を取りあげていた。一年ぶりの松緑の五斗兵衛は、早くも定番となった感がある。今回の筋書の歌の中では、「花街模様薊色縫」を詠んだ二首が、聴覚美、視覚美の両方からこの作品に迫っていて見事。「うらわかき延寿太夫」はこの時二十七歳であった。季節感は一首目の演目に代表させている。

二十九年四月「俳優名鑑」

吉右衛門すなはち佐倉宗吾かと思はるるほど胸を打たるる
〈昼②佐倉義民伝〉

三津五郎の漁樵問答ほのぼのと幕閉づるとき春もゆくめり
〈昼③の②漁樵問答〉

時蔵の茨木童子あらはれて歌舞伎味いよよ深まるらしも
〈夜②茨木〉

歌右衛門がをどるとしまを見てあればわれも恍惚君も恍惚
〈昼③の①花翫暦色所八景〉

勘三郎のほしいままなる芸のよさ源九郎狐見つつうべなふ
〈夜①義経千本桜〉

幸四郎の半九郎似の人いまもありやと問ひぬ祇園阿嬌に
〈夜③鳥辺山心中〉
勘彌こそ秀頼役者いまもなほなつかしと思ふ逍遙の筆
〈昼①沓手鳥孤城落月〉

今回から再び巻頭に戻った。内容的には新しい試みが見られる。「俳優名鑑」という題に明らかなように、演目ではなく「俳優」に焦点を当てた。筋書の歌に役者の名前を入れることは多いが、当月のように初句をすべて役者名で揃える例は他にない。役者優先であるから、座頭吉右衛門、客演三津五郎、時蔵の順に並べ、歌右衛門以下に続ける。演目が重ならないように配慮しているが、それでも演目順でないことは、筋書を購入する読者には読みづらかったか、この方針は当月のみで終わる。個々の歌では、六首目の「半九郎似の人いまもありやと問ひぬ祇園阿嬌に」などは、まるで客席の会話を掬い取って歌にしたような鮮やかさがある。季節感は二首目の結句が担っている。（二首目「閉ずる」→「閉づる」）

二十九年五月「歌舞伎だより」

香の図の若菜の巻の帯締めて源氏の芝居君も見にゆく
〈昼①源氏物語〉
海老蔵の光源氏のあでやかさ歌舞伎だよりに何と書かまし
〈昼①源氏物語〉
柏木が思ひ乱れしかなしみをわが左團次はいしくつたふる
〈昼①源氏物語〉
舞台見てわれも源氏のごとく誦す「夕殿蛍飛んで思ひ悄然」
〈昼①源氏物語〉
猿之助は知盛の死の悲壮味を希臘芝居のごとくあらはす
〈夜①義経千本桜〉
梅幸の静を見れば何時となく夢見心地となりにけらずや
〈夜②道行初音旅〉
黙阿弥の書く悪人の親しさよ湯灌場吉三見ればいやさら
〈夜③吉様参由縁音信〉
松緑の辨秀よしと友言ひぬ役者月旦幕間にして
〈夜③吉様参由縁音信〉

昼の部は源氏物語一本、夜の部が三つの演目であるから、前半四首を源氏物語、後半四首を夜の部の作品にした。一首目は、劇場に向かう風景を巧みに描いて見せたもの。源氏香図の帯が浮かび上がってくるような作品。四首目は下の句に原作の幻巻引用の漢詩をそのまま使う、意表を突く鮮やかな手法。夜の部では、それぞれの芝居の醍醐味と役者の持ち味を融合してみせたものである。中でも、市川猿之助のヨーロッパ演劇を吸収して大きく芸域を広げたことを詠んだ五首目が出色。湯灌場吉三の二首は、作者と作品を詠んだ歌と、役者の演技を詠んだ歌と、うまく棲み分けている。そして、幕間もしくは終演後、批評を語り合う劇場内の風景で全体を締めくくる。

二十九年六月「歌舞伎だより」（源氏の歌のみ再掲）

源氏物語は夜の部に移って、前月からの続演。昼の部は演目が改まるが、昼の部の歌は一首もない。昼の部は、①曽我祭因団扇絵、②平家女護島、③南蛮寺門前、④暗闇の丑松。猿之助の俊寛、松緑の丑松など魅力的な演目であり、盟友木下杢太郎の南蛮寺門前など様々な感慨があっただろうが、筋書の方針

か、それらは詠まれずに終わった。

二十九年七月「文月歌舞伎」

道行のお三輪といへばそぞろにも思ひ出すことなきにしもあらず　〈昼①妹背山婦女庭訓〉

平家蟹見つつし思ふ時蔵の凄艶は似る李賀のかの詩に　〈昼②平家蟹〉

吉右衛門の蓮生坊を見てあれば芸縹渺といみじきかなや　〈昼③一谷嫩軍記〉

鴛鴦の古典味深きひと幕に魂うばはれてありと知らゆな　〈昼④鴛鴦襖恋睦〉

うれしくもわが三津五郎は良寛となりてをどれり飄々として　〈夜①良寛と子守〉

芝居とも思へずかなし恋ゆゑに眼盲ひたる朝顔あはれ　〈夜②生寫朝顔日記〉

久しぶりに文月歌舞伎を見にゆかむ歌右衛門好きの吾妹子のため　〈夜③一本刀土俵入〉

七種の演目を順番通りに七首の歌に、個々の作品の見所とそれを支える俳優の特性を見事に歌い上げた。芸の最高峰である熊谷・吉右衛門は当然としても、平家蟹の時蔵を凄艶と評し、良寛を踊る三津五郎を飄々と捉える、観客の心にすとんと落ちる表現である。客席に共通する感想を的確な歌にして提示するからこそ、筋書の歌が単なる内容紹介の域を超えて、支持され続けた理由であるだろう。最後の歌は、歌右衛門の名前が示されるだけだが、演目の順番から、一本刀土俵入のお蔦である。お蔦の歌う八尾の小原節は、戦時中彼の地に流離していた吉井勇夫妻にとっては格別の思い入れがあっただろう。

二十九年八月「歌舞伎の夢」

はしけやし歌舞伎の夢の美しさわが鴈治郎の秋篠に見る　〈昼①白縫譚〉

亡き友の箕輪の心中見しころはわれらもなべて若かりしかな　〈昼②箕輪の心中〉

外記となる友の寿海もいささかの感慨あらむ時の推移に　〈昼②箕輪の心中〉

独楽売の独楽とならむと思ひゐぬ夢見心地となりしものから　〈昼③独楽売〉

思ひ当ることやあるらし扇雀の小春あはれと会ひて泣けるは　〈昼④河庄〉

高野聖書きつつ思ふ番町に鏡花先生居ませしころを　〈夜①高野聖〉

簑助の僧の唱ふる陀羅尼より飛騨山霧は湧けるならむか　〈夜①高野聖〉

巣林子したり顔して書きにけむ時雨の炬燵見れど飽かぬかも　〈夜②炬燵〉

夏の夜を心すがしく伊勢音頭見つつ歌舞伎のよさを思ひぬ　〈夜④伊勢音頭恋寝刃〉

二首目「亡き友」は劇界最大の盟友二代目左團次のこと。左團次にとっても同作は芸域を広げる契機となった作品で、二十代後半の吉井勇、三十代はじめの市川左團次、なつかしき若き日々である。三代目市川寿海は若き日の寿美蔵時代に左團次の藤枝外記で十吉を務めていたから、自身が外記を演じる感慨を

推測したものが三首目。このあたりの事情は、当月筋書で三宅周太郎なども述べており、戦前からの歌舞伎愛好者に共通する思いであろう。[14] 六首目は吉井勇自身が高野聖の脚本を書きながら湧き上がる鏡花への敬愛の念を吐露したもの。斯界を代表する知識派俳優六代目坂東簑助と四つに組んだ芝居は当月のみものであっただろう。夜③楼門五三桐は詠まれていないが、歌の上部に写真が掲載されている。

二十九年九月「歌舞伎消息」

はしけやし歌舞伎序 曲のだんまりのなかの高麗蔵さやかにも見む　〈昼①鞍馬山〉

猿之助本蔵となり吹くときは千古かなしき一管の竹　〈昼②仮名手本忠臣蔵〉

亡きひとの舞台写真を思ひ出で口上聞きてなみだす吾は　〈昼③追善口上〉

幸四郎の弁慶よしと書きてあり新橋阿嬌の歌舞伎消息　〈昼④勧進帳〉

歌右衛門狂女となりてをどるとき隅田川風さむく吹きそね　〈昼⑤隅田川〉

歌舞伎風驚破とばかり吹く来らしいしくもたどる獅子頭より　〈夜②連獅子〉

とうたらりとうとうたらり三津五郎が舞のいみじさ見とも飽かめや　〈夜③四季三葉草〉

時蔵が新世話物のめでたさを蚊喰鳥見てたたへやまずも　〈夜④怪談蚊喰鳥〉

当月は、七代目松本幸四郎七回忌追善と十代目市川高麗蔵襲名披露でもあるから、三首目に追善口上を詠み、一首目に高麗蔵の名を挙げる。追善演目の代表格は、七代目の代名詞の勧進帳か。「そっくり！」と新橋の芸妓の声が聞こえてくるような四首目である。猿之助の加古川本蔵、歌右衛門の隅田川の狂女などは、当然詠まれるべきもの。取りあげられないのは夜①滝口時頼。七首目の三句「みつごろう」とあえてルビを振り字余りの句としたことには意味がある。三番叟独特の初句二句が流麗に過ぎるので、一旦その流れを止め、下の句をじっくりと読ませるためであっただろう。[15]

二十九年十月「歌舞伎竹枝」

神無月も神有月となりぬべしこの芝居見てひとり笑むらく　〈昼①日本献上記〉

歌舞伎座に集ひたまへる神々に遠つ御祖のおもかげを見む　〈昼①日本献上記〉

宇野信夫書ける人情噺にもふと涙をば覚えぬるかな　〈昼②人情噺小判一両〉

梅幸の道成寺見てしばらくは忘我の境にわれも入らしめ　〈昼③京鹿子娘道成寺〉

おほらかに歌舞伎のよさを見するゆゑわが松緑の蘭平はよし　〈夜①倭仮名在原系図〉

左團次は勘平役者いとよしと隣の女たたへやまずも　〈夜②道行旅路の花聟〉

芝居ともいまは覚えず海老蔵の生島あはれと君のつぶやく　〈夜③絵島生島〉

はしけやし絵島の閨を思はせて作者の筆やいやさらに艶

〈夜③絵島生島〉

日本献上記は、芸術祭の公募脚本で、当月「芸術祭十月大歌舞伎」の目玉の一つだが、新作なのであたりさわりのない詠みぶりである（前年入選作の明治零年は詠んでいない）。次の小判一両は、初演は昭和十一年の菊吉の顔合わせで、そして吉井没後の遙か後年、平成十八年には七代目尾上菊五郎、二代目中村吉右衛門、六代目澤村田之助の三人の人間国宝（吉右衛門の指定は二十三年）で上演される宇野信夫の佳作。次の六代目譲りの梅幸の道成寺は「忘我の境」に入るの表現に相応しい。前年明治座の初役で評判を博した松緑の蘭平物狂は「よし」と断定、新定番の予感があったろうか。「左團次は勘平役者いとよし」「海老蔵の生島あはれ」は隣席や同行の女性の言葉を借りる形で変化を持たせる。

二十九年十一月「歌舞伎風流」

歌舞伎座の幕明きごろのときめきは霜月としも思ほえぬかな
〈総説・序〉

時蔵の海女満月といへる名は巣林子をば読みてわれ得つ
〈昼②珠取譚〉

亡き人のおもかげありと幸四郎の光秀を見て涙ぐむひと
〈昼③絵本太功記〉

黒塚の鬼女の持ちたる人間味童うたより来るにあらぬか
〈昼④黒塚〉

鰯売といへる新しき芝居見て三島由紀夫の鬼才おもはむ
〈昼⑤鰯売恋曳網〉

しみじみと波の鼓を見たる後作者とかたるひとときもがな
〈夜①波の鼓〉

三津五郎の猿曳あはれ人ならぬ猿にそそぐなさけいとしも
〈夜②寿靱猿〉

恋に狂ふ保名のこころわれも知る歌右衛門見て涙わりなし
〈夜③保名〉

そそくさと吃の又平あらはれて澤瀉屋てふ声の聴こゆる
〈夜④傾城反魂香〉

勘三郎贔屓の蘇小言へらくはその伊左衛門夜ごと夢むと
〈夜⑤廓文章〉

当月も芸術祭らしい、盛りだくさんの興行である。旧き佳き革袋に新しい芳醇な酒を盛り込んだ吉井勇の珠取譚、三島由紀夫の鰯売、北条秀司の波の鼓の三作品に、看板役者の顔合わせが見ものの絵本太功記と傾城反魂香と廓文章、猿之助の黒塚に歌右衛門の保名と人気作品がずらりと並んだ。それに呼応するように演目と名優を組み合わせた安定した歌いぶりである。全十種の演目のうち、昼①の菅原伝授手習鑑（道行詞の甘替）を省略して、その代わりに、霜月とも思えぬような幕開きの高揚感を詠んで導入とする。歌群を締めるのは、最後の演目の廓文章、伊左衛門の美しさを思い出しながら、夢見心地で幕を引く。

二十九年十二月「諷詠忠臣蔵」

兜より蘭奢の香りにほひ来る大序はやくも夢ここちなる
〈昼①鶴ヶ岡社頭〉

意地悪の師直なれど幸四郎扮するゆゑににくみあへずも
〈昼③足利館〉

はしけやしお軽のつくる袂風歌舞伎風とも呼ばばよけむか
〈昼⑤道行旅路の花聟〉
おのづから眼うるみ来勘平の切腹場よりきたるかなしみ
〈夜②勘平腹切〉
敵持つひとの遊びしころ思ひ祇園一力おとづれて来し
〈夜③祇園一力〉
おもひ出づそのいぢらしさしほらしさ舞台のうへの小浪似のひと
〈夜④道行旅路の嫁入〉
ものもふが蹴えはらかす大詰の雪にまされる白さあらむや
〈夜⑤高家討入り〉

当月は、財団法人演劇研究会企画の仮名手本忠臣蔵の通しである。高橋誠一郎、河竹繁俊、戸板康二、三宅周太郎の卓越した解説で充実した筋書であるが、巻頭一頁目はやはり吉井勇の歌である。歌の上下を、違い鷹の羽、二つ巴の家紋を交互に配した枠で飾っている。観客を劇場の雰囲気に誘うために香りを伴う歌で始めることがあるが（光源氏元服の日の髪の香など）、一首目もその手法。二首目には巧まざるユーモアがある。三首目四首目は暗転するお軽と勘平の運命の対比。吉井勇は一力や大石忌を詠んだ歌は多いが、祇園甲部の都踊の歌詞を依頼されてから、その縁も一層深まった。最後の歌は荒ぶる神の姿が連想されるような「蹴えはらかす」という言葉の使い方が効果的である。

三十年一月「新春歌舞伎」

段四郎の梅王丸の紅隈に春の歌舞伎の象徴を見る
〈昼①菅原伝授手習鑑〉
わが友は平作となるあはれなる老の足どりたんなたりやと
〈昼②伊賀越道中双六〉
三津五郎の喜撰法師を見るにつけ思ひ出づると多なるかなや
〈昼③六歌仙容彩〉
あかねさす陣羽織より日本の戯曲の春は来らむとする
〈昼④赤い陣羽織〉
たはむれに或る日の君は時蔵の鬼女に似たりと消息をせむ
〈昼⑤紅葉狩〉
お乳の人重の井あはれ襠裲の肩もよよとし泣くにあらずや
〈夜①恋女房染分手綱〉
須磨の海女となるともよしや歌右衛門のその凄艶さながら目離れず
〈夜②須磨の寫絵〉
荒次郎の「車匿とならむ」といふ言葉聴きつつ思ふ友亡きことを
〈夜③佐々木高綱〉
助六の花道の出の下駄の音より高らかに胸を打つもの
〈夜④助六曲輪菊〉
揚巻のあでやかさをばたたへまし歌舞伎の春の夢ごこちに
〈夜④助六曲輪菊〉

昼夜各五種の演目であるが、夜④「助六曲輪菊」で二首詠み、最後の演目「石橋」の歌はない。一首目で「梅王丸の紅隈」を「春の歌舞伎の象徴」と詠み、十首目で「揚巻のあでやかさ」を「歌舞伎の春の夢ごこち」と喩え、首尾の歌に季節感を示す。段四郎、三津五郎、時蔵、歌右衛門と並び二代目市川荒次郎の名前のあることが注目される。八首目は荒次郎演じる高野の僧智山と佐々木高綱のやりとりを詠んだもの。荒次郎は

二代目左團次一座の名脇役で、吉井勇自身も「わが市川荒次郎」[16]と呼んでいる。荒次郎の名前は、三十年十一月の筋書の歌にも見える。加えて、この作品、岡本綺堂の「佐々木高綱」は、杏花十種の一つでもあった。吉井勇にとっては最も懐かしい演目であり人だったのである。猶、本年二月は一月の続演で、新しい筋書の歌はない。

三十年三月「菊五郎歌舞伎」

菊五郎の歌舞伎の芸の味いまも伝へてうれし舞台を見れば　〈総説〉

松緑は熊谷役者花道の最後の台詞身に染むことよ　〈昼①一谷嫩軍記〉

太刀盗人見つつし思ふわが友の左團次贔屓誰彼のこと　〈昼②太刀盗人〉

梅幸の絵島に似たるひとあらばわれや夜毎に夢見むものを　〈昼③絵島生島〉

海老蔵の舞台のすがた思ひつつまたあらためて「雪たたき」読む　〈夜①雪たたき〉

この芝居見て作者の批乞ふべくも蝸牛廬主人すでにいまさず　〈夜①雪たたき〉

世話もののいみじき味を見するゆゑ鑄掛松こそ親しかりけれ　〈夜③船打込橋間白浪〉

「菊五郎歌舞伎」の題に相応しく、一首目は六代目の衣鉢を継ぐ菊五郎劇団の全盛を寿ぎ、次いで劇団の支柱である松緑、左團次、梅幸と、よき協力者である海老蔵の名前を演目の順に詠んでいる。その四首も単調にならず、松緑の芸、左團次の贔屓、梅幸の美、海老蔵の仁と、変化を持たせている。今回は演目よりも、四人の役者の健闘を伝えることに意を用いている。五首・六首は幸田露伴と作品への敬意。夜②の「まぼろし牡丹」を詠んだ歌がないのは、この作品の演出者久保田万太郎が、「『まぼろし牡丹』の作者…」という題で、岡田八千代のことを俳句五句に詠んでおり（一八頁）、重複を避けようとしたのだろうか。

三十年四月「梨園春色」

みよし野の春はのどけし猿之助の権太を見れば肥肉にして　〈昼①義経千本桜〉

はしけやしお里となりて友右衛門舞台にあれば春めくものか　〈昼①義経千本桜〉

出雲崎の遊女といへる芝居見て綺堂の劇の才を羨しむ　〈昼②出雲崎の遊女〉

幸四郎の西郷を見ておもへらくこれや或る日のわれに似たりと　〈昼③西郷と豚姫〉

三津五郎は座頭の手振り軽やかにたんなたりやと人を酔はしむ　〈昼④座頭〉

歌右衛門の浅妻船を見しことの楽しさを言ふ祇園蘇小は　〈昼⑤浅妻船〉

新平家物語見て人生の起伏おもふはわればかりかは　〈夜①新・平家物語〉

時蔵のおわさあはれと思ひつつ古典歌舞伎の美をばたたふる　〈夜②御所桜堀川夜討〉

勘三郎の芝居よく見むわが知れる幇間誰彼おもひ出でつつ

〈夜④親子燈籠〉

君が目のそそげば妬たし元禄の花見踊のなかの一人に

〈夜⑤元禄花見踊〉

一首目と二首目は、歌の骨組みが酷似する。釣瓶鮨屋の歌であること、役者名と役名を詠むこと、「春はのどけし」「春めくものか」と季節感を表すことである。重複を避け一首だけ残すとすれば、主役の権太であり大幹部の猿之助を詠んだ歌の方である。それは、幸四郎の西郷、三津五郎の座頭、歌右衛門の白拍子、時蔵のおわさ、勘三郎の幇間と、大幹部の名前と代表的な演目や役名を組み合わせる、当月の方針とも一致する。それらに伍して七代目大谷友右衛門の名前があげられていることが注目される。釣瓶鮨屋で重複しても、一時映画界に身を投じ、この年歌舞伎界に復帰したこの逸材を、吉井勇は取りあげたかったのであろう。夜③望月は詠まれていない。

三十年五月「追善皐月歌舞伎」

亡き父に似たる姿になみだ落つ摩耶山中の錣引見て

〈昼①錣引〉

口上に並ぶ役者は誰々ぞ舞台かすみて慥とわかざる

〈昼②追善口上〉

対面の五郎を見ればおもひ出づ亡き菊五郎の遠きおもかげ

〈昼③寿曽我対面〉

吉野山静御前の左團次の削りし茶杓の銘ををしへよ

〈昼④道行初音旅〔義経千本桜〕〉

五郎蔵の花道の出のいさぎよさいしくも友の芸をつたふる

〈昼⑤侠客御所五郎蔵〉

過ぎし日の夢をふたたび見るごとし松王丸の病ひ鉢巻

〈夜①菅原伝授手習鑑〉

権八となりし亡き友おもふとき髯題目もかなしきろかも

〈夜②鈴ヶ森〉

かくばかり皐月の歌舞伎身に染むは鏡獅子見しためにあらぬか

〈夜③鏡獅子〉

人間味いとど深しと思ふからに按摩道玄の悪をにくまず

〈夜④盲長屋梅加賀鳶〉

悵然としてわれありぬ亡き友の最後の舞台思ひ出でつつ

〈夜④盲長屋梅加賀鳶〉

当月は六代目尾上菊五郎の七回忌・六世坂東彦三郎の十七回忌追善興行である。一首目は六世の子の七代目彦三郎を詠んだもの。当然ながら「亡き菊五郎」「亡き友」と六代目を偲ぶ歌が多い。八首目は直截的表現ではないが、鏡獅子を見ればすぐに六代目の名演が思われるからこそ深く「身に染む」のである。しんみりした歌が多いから、四首目で少し肩の力を抜くことが出来る。九首目十首目「盲長屋梅加賀鳶」の道玄の役は、六首目の寺子屋の松王丸と共に、六代目最後の舞台となったもの[17]。追善興行の最後の演目を見ながら、六代目に思いを馳せ、六代目の記憶を胸に劇場を去る多くの人々の気持ちを代弁する。この日劇場を訪れたすべての観客の思いを巧みに三十一文字に凝縮して見せたものである。

三十年六月「歌舞伎小吟」

うちひさす都歌舞伎の絵看板わが夏の夜の夢にこそ見め

〈総説〉

引窓を見ればおもひぬ幾年をわがわび居せし八幡月夜を
〈昼①双蝶々曲輪日記〉

涼しさは三升つくる舞踊劇杜若より来るにあらぬか
〈昼②杜若〉

聖一の巳の吉殺し見るほどにわが市井好きいよよつのらむ
〈昼③巳の吉殺し〉

武州公秘話を天下の奇書といふ友の言葉をわれもうべなふ
〈夜①武州公秘話〉

潺湲亭のあるじが笑めるしたり顔この芝居見てふと思ひ出づ
〈夜①武州公秘話〉

道成寺といへばなつかし亡き人の艶なる姿さながらにして
〈夜②京鹿子娘道成寺〉

狂ほしき筆屋幸兵衛花道にかかる時しも大夕立来る
〈夜③水天宮利生深川〉

演目数が少ないので、すべてを網羅し、かつ一首目に季節感を出す総説の歌を置く。二首目は、吉井勇が戦後最初の三年間を過ごした府下八幡町の月夜田の里の「わび居」の記憶を重ねる。三首目は六代目菊五郎が演じたかったといわれる作品。四首目は縮屋新助の話の実話。類話が多いので、作者の舟橋聖一の名前を頭に冠した。五首目、六首目は、この「天下の奇書」をどう舞台化するか、未見の段階なのでこうした詠み方になる。自分以外には書けまいと得意げな谷崎潤一郎の「したり顔」が髣髴とする。七首目は、梅幸の花子の姿に、六代目の残像が重なって見えるのであろう。八首目は「大夕立」で再び季節感を出して締めくくる。

三十年七月「歌舞伎の夏」

わが友の喜熨斗政泰狭手彦となりて歌舞伎の夏ははじまる
〈昼①大佛炎上〉

口上の幕にむかしの夢を追ひ我童といふ名をなつかしみ居り
〈昼②襲名披露口上〉

今の世の伊右衛門役者ただひとり汝にまさるものなしと思はむ
〈昼③隠亡堀〉

すさまじき隠亡堀の水のいろ夏寒くして幕も閉ぢぬる
〈昼③隠亡堀〉

何でとも忘れてうれしよくをどる善玉もよし悪玉もよし
〈昼④の①三社祭〉

爺婆の手ぶりも時にかなしかり夕顔棚の作者おもへば
〈昼④の③夕顔棚夜〉

頓兵衛の白髪頭の赤面も清長ゑがく役者絵かこれ
〈夜①神霊矢口渡〉

三津五郎の文室を見つつ思へらくこれやいみじき芸の極みと
〈夜②文屋〉

そのうちに友の戯曲を見にゆかむとしも思ひて京の月見る
〈夜③十五夜物語〉

さまざまの思ひ出あれば歌舞伎座の夏芝居よりうれしきはなし
〈総説〉

最初の演目「大佛炎上」（大佛と海老蔵の因縁の「大佛炎上」ではない）は新作なので猿之助の本名を出して軽く流してみた。「喜熨斗政泰狭手彦」と漢字が続く表記の効果も考えたか[18]。結句で季節感を表す。二首目は襲名の十三代目片岡我童

への挨拶。当月伊右衛門を演じたのは仁左衛門。「隠亡堀の水の色夏寒くして」は、夏場の怪談噺の面白さを伝える。「夕顔棚の作者」は川尻清潭、この前年十二月に没したので哀悼の思いを籠めた。八首目、三津五郎の舞踊はやはり筋書の歌に欠くべからざるもの。九首目の「十五夜物語」は谷崎潤一郎の大正年間の作品を劇化したもの。十首目は夏芝居全体を詠み、最後の演目、中野実の「褌醫者」はこの翌月東宝映画も公開されるがここでは詠まれていない。（九首目「思いて」→「思ひて」）

三十年八月「新派讃」

われ若く新派の芝居よく見たる頃をおもふも感傷かこれ
〈総説〉

文月のすずしき風は歌舞伎座の泉鏡花の舞台より来る
〈昼②海神別荘〉

番町の先生のこと思ひつつ海神別荘見ればなつかし
〈昼②海神別荘〉

かたることいつか新派の芸となり緑樹夜ばなし三更を過ぐ
〈総説〉

花柳の「女難花火」を読み終りさておもへらく新派人生
〈総説〉

はしけやし八重子のお蝶夫人見て夢見る人とならむとすらむ
〈昼④お蝶夫人〉

舞台見て思はずひとりつぶやきぬ新派の芸の冴え来しことよ
〈総説〉

なつかしき高田実のむかしより新派の芝居見れど飽かぬかも
〈総説〉

当月は新派の公演。昼①墨壺、②海神別荘、③相続人は誰だ、④お蝶夫人、夜①八月十五夜の茶屋。ほとんど新作のため、吉井勇は演目を詠むのではなく、歌題通りに新派への讃歌としている。一首目と八首目に、若き日からの新派への傾倒を置き序跋とする。明治座で江見水蔭翻案の「オセロ」を見て以来の「高田贔屓」の様子は早く『娑婆風流』[19]に記されるところ。緑樹（喜多村緑郎）、花柳章太郎、水谷八重子ら現役の幹部名を出すが、演目と絡めるのはお蝶夫人のみ。そうした中で「海神別荘」を詠んだ歌が二首あるのは、泉鏡花に傾倒した吉井勇らしい。

三十年九月「中村吉右衛門を憶ふ」

南座の楽屋を訪ひて句のはなし小唄のはなしせしは何時ぞも
〈総説〉

比叡鶏今日もきたりて鳴くゆふべ秀山の句にしたしみにけり
〈総説〉

豊隆がむかしロダンの彫刻にたとへし君の舞台忘れず
〈総説〉

吉艶のふとりし女将泣きながらおろおろ語るわが友の死を
〈総説〉

京もまた君が句集の中にある花石榴咲くころとなりぬる
〈総説〉

吉井勇の筋書の歌が当月の演目を絡めながら詠む方法を確立させてから以後の物としては極めて異質である。吉右衛門その人への追憶の歌ばかりで、演目に関わるものは一首もない。一周忌追善の興行で、編集の方針でもあろうが、吉井勇にとって

も吉右衛門の存在は大きかった。三首目は、小宮豊隆の「吉右衛門が舞台に上る時（中略）、ロダンの「祈禱」の像を想ひ出さずにゐられない」[20]などを受けたもの。「吉艶のふとりし女将」とは、吉右衛門の定宿祇園吉つやの今井スエのこと。[21]この月刊行の雑誌『幕間』臨時増刊『中村吉右衛門』に「はりまやさん」という文章を寄せている。一首目二首目は、俳人としての側面に光を当てる。「花石榴」を詠んだ句は『吉右衛門句集』の中に散見するが、「柊屋の古き土塀や花石榴」（昭和六年）などを想起しているであろうか。

三十年十一月「歌舞伎役者揃」

幸四郎の田村麻呂見て日本の歴史学びし頃をこそ思へ
〈昼①辺城の人〉

むかし往きし御霊文楽思ひゐぬわが芝雀の三勝を見て
〈昼②艶容女舞衣〉

わがこのむ勘三郎よわがこのむ末摘花ようれし源語よ
〈昼③末摘花〉

猿之助の五右衛門を見て思へらく歌舞伎美まさにいまも残ると
〈昼④楼門五三桐〉

写楽の絵より抜け出でて三津五郎は久吉となり来しにあらぬか
〈昼④楼門五三桐〉

歌右衛門の海女をあはれと思へども仮の姿のすべあらめやも
〈昼⑤海女〉

時蔵の女暫見つつ吾も歌舞伎のよさに思ひあたりぬ
〈夜①女暫〉

延二郎よ三島由紀夫の脚本に負けるなかれとはげます吾は
〈夜②芙蓉露大内實記〉

吉之丞の瀬尾の白髪頭にもたふときもののありと知りきや
〈夜③平家女護島〉

荒次郎の舞台を見つつ吾はひとり自由劇場のころを思はむ
〈昼①辺城の人〉

今回は、歌題にある如く、役者名を列挙する形を取る。一首目は新作のため内容には触れない。全十首の構造の頂点は、時蔵の女暫と、猿之助・三津五郎の楼門など。三首目は軽妙な中に涙を誘う作品らしく軽やかな詠み方。これらを中央に置き、周辺に若手や中堅、名脇役を配する。中で二代目實川延二郎を激励する散文的なまでの率直な詠みぶりが目を惹く。父延若に近づいて欲しいとの思いか。この大内晴持の演技で芸術祭奨励賞を受賞する。九首目は故吉右衛門の大番頭的存在の初代中村吉之丞に対する親愛の情。市川荒次郎は当月辺城の人の老人エモシボ一役のみだが、演目順の短歌排列を乱してでも、左團次や小山内薫につながるこの人の名前は記しておきたかったのだろう。当月はほかに夜④雨だれ太鼓、⑤月宴紅葉繡。

三十年十二月「師走歌舞伎」

東京も顔見世月か歌舞伎座の廊下かくまで賑はひ居るは
〈総説〉

幸四郎は扶桑文字の祖に扮すわれも筆法伝授受けまし
〈昼①の①筆法伝授〉

京にあれば源蔵戻りの中車をば思ひ描きて楽しとぞする
〈昼①の④寺子屋〉

芸に年なしといふこと三津五郎の釣女見て思ひあたりぬ

〈昼①の③釣り女〉

弁慶の六法見れば日本の歌舞伎美ながく滅びずと思ふ

〈夜②勧進帳〉

伊十郎の勧進帳に酔へるとき栄二の撥の冴えまさるとき

〈夜②勧進帳〉

はしけやしお半に恍となるひとも延寿太夫の芸をたたへよ

〈夜④桂川連理柵〉

一首目は顔見世の劇場のにぎやかな風景。当月の昼の部は菅原伝授手習鑑の筆法伝授、道明寺、寺子屋の通し。幸四郎が菅丞相と寺子屋の松王を演じ、間狂言に釣り女が入る形。二首目三首目に菅原伝授手習鑑をまとめて、釣り女を後ろにした。その四首目は句の切れ目と意の切れ目をずらして、じっくりと思索するさまを表現。「芸に年なし」とされた坂東三津五郎はこのとき七十三歳。夜の部は四種の演目から二種。十四代目守田勘彌の夜①茅の屋根、若手の夜③戻駕色相肩は詠まれていない。五首目は平凡なようだが、幸四郎の弁慶ならば当然の感想。六首目七首目は、七代目芳村伊十郎、杵屋栄二、六代目清元延寿太夫等の至芸が聞こえてくるような名吟である。

四　第三期までのまとめ

歌舞伎座筋書の歌は最初から形が整っていたわけではない。『源氏物語』上演に際して、古典文学と歌舞伎の両方に通じている歌人として歌を求められ、ついで襲名の歌、正月の劇場風景の歌、数度の源氏物語の歌を経て、当月演目の内容を詠む筋書の歌となるのは、二十七年十一月の顔見世大歌舞伎の時からである。これが大好評だったのだろう。二十八年には一年間、毎月の演目やそれを演じる役者について詠んだ歌が掲載される。二十九年一月、二月は、筋書に吉井の歌がない。推測の域を出ないが、一年の約束であった吉井の歌の再登場を求める声が大きくなったのではないか。三月から再開された吉井勇の歌は、筋書には不可欠の存在となってゆく。四月からは筋書の一頁目に固定され、筋書の顔としての扱いをされていることも、再開を慫慂されたのではないかとの推測を後押しするものである。これ以降、逝去の月まで筋書の歌を書き続けることになり、吉井勇晩年のライフワークの一つとなっていく。

注

（1）『吉井勇全集』第八巻の月報で、後藤亮が「吉井勇の芝居歌」という一文を寄せて、芝居歌が全集から漏れていることを惜しんでいる所以である。

（2）例外的に昭和二十七年五月六月の源氏物語の演目の時に「藤壺御落命」「龍頭鷁首」などと附記されている。

（3）木俣修は、吉井勇の芝居の歌を「解説歌か紹介歌か、あるいは宣伝歌以上にでているものは少く」（『吉井勇全集』第三巻解題）とするが、そうした見方が的外れであることは、本稿で紹介した個々の筋書の歌が、観客と舞台をつなぐ役割を持ち、同時に芸の奥深さを巧みに析出しているのを見れば明らかであろう。

（4）雑誌『花道』二十三年九月号に、花道の面白さを詠んだ歌の中に「梅王の飛六法のおもしろさわがたましひも花道を飛ぶ」がある。

（5）芸術祭参加の二十八年十月十一月や、再開後の二十九年三月は巻頭ではないので、巻頭に固定されるのは、二十九年四月と考えるべ

きだろう。

(6) 猿隈は、滑稽味を加味して詠むのが常道（春はよしかの朝比奈の隈取も友の酔ひたる顔に似たれば「戯場小景」『悪の華』歌舞伎座出版部、昭和二年。朝比奈の猿隈を見てわらひたるひと艶なりし頃もおもはむ「梨園春詠」「幕間」『和敬書店、二十五年一月号）だろうが、ここは敢えて歌舞伎美に収斂させている。

(7) 『洛北随筆』「面壁独語」（甲鳥書林、昭和十五年）には、荒木芳男から左團次の「夜叉王」、中車の「弁慶」などを描いて貰ったことを述べている。

(8) 京都府立京都学・歴彩館所蔵、昭和二十八年七月十六日大谷竹次郎書簡。書簡には月日のみ記され、消印は年が不明だが、内容からこの年月日と推測した。猶、『吉井勇全集』は筋書に掲載された歌を採録しない方針だが、吉井没後の歌を全集編者が選んだ「形影抄以後」には本七首が収録されている。その理由は不明である。

(9) 大崎周水堂（福岡市）製作、刊行年不明。筋書の歌からは「梅幸の鏡獅子見るよろこびを祇園蘇小に書きてやらまし」（二十八年十月）も採られている。

(10) 『歌随筆　雷』「地獄草紙」（天理時報社、昭和十七年）。初出は、読売新聞昭和十年十月の「身辺雑記」。また、宮戸座時代からの吉井勇の親友荒木芳男の従兄弟でもある（荒木『芝居スケッチ三十年』河出書房、昭和十三年十一月、に寄せた吉井の序文「荒木芳男」による）。木下も自身の歌舞伎絵が「従兄にあたる故荒木芳男」から影響を与えられたことを述べている（『歌舞伎素描』講談社、昭和四十三年十二月「著者のことば」）。

(11) 必ずしも初出の記憶ではなく、『演劇論叢』（聖文閣、昭和十二年）などで再読の可能性もあろうが、早くに『明星』に劇評を書いていた吉井勇は『新小説』の小宮論文には当然目を通していたであろう。猶、今月の演目が盛綱陣屋であるから、同じく小宮の「『陣屋』の盛綱（上下）」（『演芸画報』一巻一号二号、大正三年十一月十二月号）「私の見た役者の中では、吉右衛門の盛綱が一等の出来でした」なども頭の片隅にあったかもしれない。

(12) 『東京・京都・大阪　よき日古き日』「蘭蝶」（中央公論社、昭和二十九年）。

(13) 「蘭蝶風邪」は『オール読物』昭和二十五年五月号初出、この筋書の前年『蝦蟆鉄拐』という小説集に再録。また「蘭蝶を聴きつつかかる時死ぬも惜しからじとぞ思ひ初めにし」の歌は『酒ほがひ』『東京紅燈集』『鸚鵡石』などに重ねて収められ、特別な思い出であった。

(14) 吉井勇は、高知から京都に居を移した昭和十三年に久しぶりに落ち着いて南座の顔見世見物の時間を得たが、そこでも左團次と寿美蔵（寿海）の二人を同じ舞台に見ることが出来る感激を述べている（『洛北随筆』「左團次の芸骨」甲鳥書林、昭和十五年）。

(15) 同じく三番叟を詠んだ二十八年四月の「とうたらりとうとうたらり三津五郎の舌出し三番忘れえめやも」〈昼①再春菘種蒔〉も同様の操作である。字余りを回避したいときには、三十年三月「菊五郎の歌舞伎の芸の味いまも伝へてうれし舞台を見れば」〈総説〉、三十一年九月「角兵衛ををどる三津五郎見るときはいとけなき日の恋しきものを」〈昼④角兵衛と女太夫〉で、それぞれ「きくごろ」「みつごろ」とルビを振る。

(16) 『娑婆風流』「市井夜講」岡倉書房、昭和十年。二代目市川荒次郎は、左團次の九歳年下の従兄弟で、脇役として左團次の活動を支えた。昭和三年のソ連公演にも同行している。荒次郎の舞台姿を詠んだものは『悪の華』歌舞伎座出版部、昭和二年などにも散見するが、「荒次郎が疎開の先の山陰の炭焼き嘶ふとも思ひ出づ」「梨園回

想」『幕間』和敬書店、昭和二十六年一月号、などの歌もある。猶、市川荒次郎は昭和三十二年六月に長逝しているが、吉井勇は『幕間』同年八月号に、「市川荒次郎を憶ふ」の文章を寄せており、自由劇場の旗揚げ以来の交流と、戦後四条通で偶然出会い、金子竹次郎の万屋で語り明かしたことなどを記している。「炭焼き噺」はその時の話である。

(17) 六代目最後の舞台のことは、当月筋書に、遠藤為春「世話物二種」でも言及しており、それらを併せ読んで、多くの観客は筋書の末尾の歌を、一層しみじみと味わったことであろう。

(18) 三十一年七月の筋書でも「わが友の喜劇斗政泰信長となるをうれしと思はざらめや」と詠んでいる。珍しい姓であるから使用したというだけではなく、役名まで七文字、八文字と続く漢字表記の面白さを狙ったもので、短歌の文字表記のもたらす効果について、吉井勇は極めて意識的であったことの証左としてよかろう。

(19) 花柳章太郎の歌にある『女難花火』(雲井書店)はこの年五月二十五日に刊行されたばかりである。

(20) 小宮豊隆「中村吉右衛門論」『新小説』明治四十四年八月号。昭和二十八年九月の筋書にも「豊隆の吉右衛門論思ひ出でて」の歌があった。

(21) 昭和二十七年南座顔見世の時の、松本さだ、吉右衛門夫人、幸四郎夫人等と一緒に映った写真に「吉つや女将(吉右衛門贔屓)」の姿がある。(『幕間』昭和二十八年一月号)

(附記) 大谷竹次郎書簡の閲覧に御高配を賜った、京都府立京都学・歴彩館に深謝申し上げる。

(たさか・けんじ)